

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会
会長：竹之下 洲 一
編集者 広報部：恒 吉 一 洋

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995(65)1553



米丸マール



住吉池マール

蒲生地区に2つの活火山！

恒 見 勝 則

蒲生地区とその周辺には、約8100年前に相次いでマグマ水蒸気爆発を起こした米丸マールと住吉池マールがあります。米丸マールから流れた火砕流（ベースサージ）は、米丸から遠い建昌城跡（始良市西餅田）で厚さ約2mも堆積しています。住吉池マールはマグマを含まない水蒸気爆発でした。2つとも爆発が一回きりで終わったために火山体にならず、鍋状の陥没地形となりました。

米丸マールは、火口に周囲から水や泥が流れ込んで沼地となり、弘治3年（1557）の菱刈陣の戦いでは、島津勢に追い落とされた菱刈勢100余名が溺死したと伝えられています。その後、暗渠排水工事や耕地整理などが行われ、広い水田となりました。

住吉池マールは、爆発の時南風であったので、噴火物は火口の北側に堆積しています。火口には大量の水がたまっていたましたが、更にトンネルを掘って水を確保し、池周辺の水利に役立っています。

2つのマールの間に、約10万年前に噴火した青敷山火砕流からなる単成火山群があり、大塚・小塚・狐塚などの山がありますが、いずれもなだらかな円形をした丘で、地籍は米丸牧神山となっています。

青敷野馬牧は島津義弘の愛馬「膝跪駢」（ひざつきくりげ）の産地

蒲生家12代清寛の時代、ここ青敷山のなだらかな円形をした丘に牧場を造り、藩政時代は藩の馬牧となりました。この牧からは名馬や神馬も出ましたが、蒲生地頭・長寿院盛淳が島津義弘に献上した青敷野馬牧産の雌馬は、元龜3年（1572）日向国伊東氏との木崎原の戦いで義弘の乗馬となり、敵将との一騎討ちのとき前膝をついて義弘に勝ちをもたらしました。以後「膝跪駢」として有名になりました。

なお、膝跪駢の産地には加治木説・栗野説もあります。



膝跪駢の墓（左）と由来碑（右）

日向山九品院般若寺 (湧水町吉松)

永富 巖

この寺は、応和年間(961～963)に、霧島で修行中であつた性空上人の開基と伝えられています。

また、足利尊氏がここに本陣を構え、「日向山のあるじを来てみれば 端山に照らすありあけの月」と詠んだという歌碑があります。

島津義弘は、えびのの飯野城(1564～1590)、栗野の松尾城(1590～1595)に在城時、当寺を祈願所として鐘楼・釣鐘等を寄進し、その後加治木に居城を移す際には、当寺の住持頼長法印を召して加治木に般若寺を建立し掛け持ちの住持としています。当寺への信仰の深さがうかがわれます。

寺跡に残る古石塔群と、鹿児島島の茶の発祥地の一つといわれる茶樹が、往時の古刹の名残を留めているようです。



古石塔群と茶樹

松尾城

佐土原 保子

JR栗野駅から東北に小高い丘が見えます。一般に城山と呼ばれています。

その昔、ここに松尾城という山城がありました。島津家第17代義弘公が、天正8年(1590)飯野城から移城し、文禄4年(1595)まで約5年間居城しました。鹿児島島の山城としては唯一城壁に石垣のある山城であり、たいへん貴重な史跡です。



松尾城虎口

義弘公は、この城に移り住む前に、太田道灌の子孫とも言われる太田武篇之介に命じて城を改築させたと伝えられています。北側の台地に二の丸があり、義弘公の夫人が居住されていたということです。

本丸への出入口にあたる虎口は、安山岩の野面積みの石垣を築き、細長い急坂を曲折して出入りする造りです。敵が攻めてきても、城の斜面には雑草が生えていてこれに絡まり、登りにくいように工夫されています。

本丸の周りには、常緑の灌木(低木)である「しゃしゃんぼ」が植えてあります。本丸の内部が見えないように、目隠しのため植えられたといえます。小さい実がなる「しゃしゃんぼ」は俗に「ミソッチヨ」とも呼ばれています。

「湧水町史跡めぐり」について

平成28年度歴史ボランティアガイド養成講座

受講生 玉利 良一

去る6月9日、私共受講生を含む約20名は、義弘公の足跡をたどって「湧水町史跡巡り」を実施しました。日ごろの行いのしわざか、当日は雨に降られることもなく湧水町汽商会ガイド様の心のこもったご協力を得て、充実した巡見を体験することができました。特に歓迎のために幟まで作成されたことに驚きました。当会においても、参考の必要ありと考えます。

巡見のポイント解説などは、先輩諸氏にお任せして一つだけ感じたことを記述します。それは松尾城の変貌です。一昨年個人で訪れた時とは驚くほどに

景観が変化していました。よく言えばきれいになった、辛辣しんらつに言えば平凡な公園になり、往時をしのぶ緑が減ってガッカリしました。史跡のあり方には、いろいろな考えがあることを痛感しました。

最後に、まだ見習い中の小生に本稿の作成を命じられたことを、いじめではなく愛の鞭むちととらえておりますのでご安心ください。

平成 27 年度 鹿児島大学 歴史学実習史跡調査（ガイド実践報告）

宮内 伸一



蒲生城跡から蒲生の町並みを望む

3月1日から2日にかけて、鹿児島大学教育学部の歴史学実習に係る蒲生地区の史跡巡見ならびに古文書調査が実施されました。

史跡巡見については、始良歴史ボランティア協会にガイド依頼があり、今回は企画部が担当しました。

1日目は、蒲生城跡や蒲生どん墓等の史跡巡見をした後、蒲生公民館で「蒲生御仮屋文書おかりやもんじょ」を調査しました。参加者は、学生12名と教員2名でしたが、皆さん大変熱心で、史跡や古文書についての説明を聞きながら、細部まで詳しく調査されていました。

2日目は蒲生の市街地を中心に16ヶ所の史跡巡見を行いました。暑い日差しの中、午後3時頃まで歩いて蒲生の市街地を巡りましたが、皆さん、それぞれに課題意識を持って参加されており、私たちにとっても大変勉強になりました。

「岩戸川原いわとがわらの戦いちな」に因む地名について

迫村 あけみ



天文24年(1555)北村城を攻撃した島津貴久たかひさの軍勢は、敵将北村清康きよやすの策略さくりやくにはまり、死をも覚悟するほどの激戦を強いられましたが、忠臣の働きで退路を確保することができました。

現在の蒲生町岩戸から良久らうくあたりまで、この退却にまつわる話が地名として残っています。

【左箆ひだりえびら】島津軍が白男の滝そばの急峻な岩場を通るとき、背負った箆えびら（矢の入れ物）が邪魔になるので、左側に背負い替えた。

【餅坂】島津軍が敗走の際、湯ノ脇集落で餅用蒸し米を盗み、このあたりで食べた後セイロを置いて行った。

【帰ヶ谷けがたい】敗走の兵士たちがこの谷に入ったが、行先に迷い元の道を帰った。

【面貫めんぬき】島津軍はこの辺りまで逃げることができ、安心してやっと鎧よろいや面を脱ぐことができた。

【良久らうく】面貫坂めんぬきさかを登ると、後は楽になった。

いくつかあげてみましたが、いつも馴染んでいる地名でも調べてみると、以外と面白い由来があるかもしれません。



良久の「伊進様御休所」碑

明治十年役山田村出陣人名碑

松下 澄行

県道 391 号線を登り、上名池平^{いげひら}と寺師山元の境にある道を右手に進むとこの碑があります。

場所は昔の道（奈良 袂^{ならたもと}から子戸ケ谷を登りついた所）と、池平から登ってきた道との合流点（三叉路）の小高い所にあたります。

碑は北を正面に建ててあり、正面に「明治十年役山田村出陣人名」、昭和五年（1930）六月建立とあります。左側面に 71 名・背面 86 名・右側面 75 名、合計 232 名が刻まれています。（始良町郷土史の記録と同数）

では、なぜこの地にあるのでしょうか。



この地点が山田と北山・木津志との境界付近であったため、両地区の人々がお互いの目線をもって出陣者を敬ったのでは？

また、坂道を登ってきた人々が峠で出会ったり別れたり、道中を共にする場所でもあり、この碑が道標にもなったのではないのでしょうか。

帖佐 吠^{かます}（歴史民俗資料館蔵）

梅田 眞次

天保 4 年（1843）の『三国名勝図会』の大隅国始羅郡帖佐^{しらす}の項に「筵囊^{むしろぶくろ}、住民多く製して生業を資く」とあるので、古くから農家の副業として作られていたようです。

昭和の初め頃足踏み式の吠^{かます}機が普及しました。

戦後この地区で機織りの大会がありました。その時の写真が歴民館の 2 階展示場に吠機とともに展示されています。

帖佐の吠は、主に穀物・芋・塩などを入れるため

に使われました。当時は県内一の生産量を誇り、県内はもとより宮崎県まで販売されました。昭和 30 年代に入ると紙製の袋が出回るようになり、今ではほとんど見るができなくなりました。



※ 吠（かます）…稲わらを編んで作った袋

あなたの近くに田の神さあ

頭にコシキ 手にメシゲ

口をゆがめて おどけたお顔

新中あたりの田んぼん土手においやった

もとは持ち回りじゃったが

田の畦にもどされっせえ

今ん集会場で陽ざらしじゃがよ



春、田起こしが始まるころになると、山の神が田んぼに下ってきて田の神となり、秋収穫を見届けると、山に帰って山の神となると信じられており、人々は講を開き、ごちそうを備えて歓迎します。そして、収穫が終わると、餅の入ったワラットを背負わせて山へおくるのだといひます。